

氏 名 大野 順子

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第 1401 号

学位授与の日付 平成 23 年 3 月 24 日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本文学研究専攻
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 中世前期における和歌表現の研究－新古今的表現への道筋

論文審査委員 主 査 教授 中村 康夫
教授 寺島 恒世
准教授 齋藤 真麻理
教授 田淵 句美子 早稲田大学
教授 谷 知子 フェリス女学院大学

論文内容の要旨

いわゆる新古今時代に、六条藤家を中心とする旧風歌人らと定家ら御子左家系を中心とする新進の新風歌人らの歌風に対立的な構造があったことは、よく知られたところである。新風歌人が台頭する以前の詠風は何よりも先例を重んじるものであり、歌合の場でも先例の有無が和歌の善し悪しに積極的にかかわって勝敗を左右することがままあった。このような流れに対して、定家ら新風歌人は従来の常識にとらわれない和歌表現の可能性を追求したのである。この新風歌人らによって行われた本歌取りや新奇な歌語の続けがらの工夫などは、当然のことながら旧風をよしとする人々には受け入れられることはなく、定家が後年に『拾遺愚草員外』において「自文治建久以来、称新儀非抛達磨歌、為天下貴賤被悪、已欲被棄置」と回顧するような状況に陥った。この旧風と新風との対立は建久期を通じて続いていくのであるが、『正治初度百首』で詠進された定家の詠風に後鳥羽院が魅了されるや、新風の詠法が歌壇を席卷する方向へと急速に傾いていき、やがて新風歌人らによって一時代が形成されるに至るのである。このように旧風の歌人らにとって、新風の詠法は非常に抵抗感を強く感じるようなものであったとはいうものの、当然のことながら、定家を中心とした新風歌人のグループによって、それまでの和歌史とは関わりなく独自に創出されたとまでは言い得ない。既存の方法に馴染まず、いかに斬新な方法論に見えようとも、三十一字という和歌の大前提に変更がない限り、何らかの形で前代の影響を受けることは必然である。それまで続いてきた流れに新たな要素を付加することで独自の方向へと転換した先で、それまでにない斬新な方法論を確立するというような道筋を経てきたと考えるのが自然であろう。

新古今時代に表現手法として確立した「本歌取り」などは、まさにそういった道筋を経たものである。古歌の一部を自らの歌に取り込むという例そのものはかなり古くから見られたのであるが、『新撰髓脳』において「古歌を本文にして詠めることあり。それは言ふべからず」と述べられているように、古くには古歌を取るという行為が否定的に捉えられており、表現の手法としては公式に認められるものではなかった。しかし、それも時代が下り、十一世紀後半あたりになってくると、「古き歌に詠み似せつれば悪きを、今の歌詠み益しつればあしからずと承る」（『俊頼髓脳』）あるいは「古き歌の心は詠むまじきことなれども、よく詠みつれば皆用ゐらる」（『奥義抄』）等と記述されるように、本歌を「詠み増す」という限定付きながら古歌を取るという方法がさまざまな歌学書のなかで認められるようになってくる。また、『中宮亮重家朝臣家歌合』（永万二年）の判詞において判者・俊成は「ふるき名歌もよく取りなしつれば、をかしきこととなん古き人申し侍りし」と述べており、十二世紀あたりには本歌取りが次第に肯定的に捉えられてゆく様がさまざまな面から看取されるようになるのである。しかしながら残念なことに、こうした否定から肯定への変位が如何なる事象によって起きたことであるのか、それを明確に示す文献を見いだすことはできない。

ところで、本歌取りに対する意識の変化が起きはじめたと思われる十二世紀あたりから、和歌の周縁部ともいえる領域——本稿において取り上げようと考えているのは、今様と短連歌である。——において活発な動きが見られるようになってきていた。これは新風和歌の始発期と踵をつぐ時期のことであり、本歌取りへの意識の変化を考える上で、決して見過ごしにはできない。和歌よりは一段低く見られていたとはいいいながら、広い意味で「歌」として括りこむことのできる今様や連歌が盛りあがりを見せていた状況は、何らかの形で第一文芸である和歌の詠風に影響を与えずにはおこななかったであろう。従来、貴族文化の粹とも言うべき和歌が、後発の遊戯である今様や短連歌に対して影響を及ぼしていることについては論じられてきたものの、その反対に和歌の周縁部から和歌本体への影響に

については、歌人や歌語の個別の特性としては論じられても、それらがその時代の和歌全体に影響を及ぼすというような可能性についてはほとんど考えられてこなかった。しかし、院政期以降の和歌を丹念に辿っていくと、周縁部から和歌へと揺り返してくる流れが見えてくる。また、この流れは遊びの文芸の気楽さから発せられたものであるからか和歌では許されないような要素を多分に含んでいるのであるが、それらは本歌取りがこの時期に否定から肯定へと言説を変化させたまさにその転換点に影響を与えた可能性を想像させる。

そこで、第一章において院政期以降の和歌と今様の関係について論じ、王朝的なもの以外から歌語の拡張を図ろうとしていた時代に、今様の語彙が和歌に受け入れられて新古今時代まで生き残っていたことを確認した。こうして今様の影響が和歌に見られることを前提とした上で、今様の生命力の源とも言える「歌い換え」の方法までもが和歌に取り入れられており、それが言説を肯定に転じた初期の本歌取りが条件としていた「詠み増す」に接近するものであり、本歌取りの方法にも和歌の周縁領域が関わっていた可能性を提示した。

続く第二章においては同様に和歌の周縁部にあった短連歌と和歌の関係について、短連歌を集め・詠むことに強い関心を抱いていた俊頼が短連歌を作るにあたって庶幾した方法を軸に据えて考察した。これまでの研究では、和歌における本歌取りのような先行作品摂取は短連歌には見られないといわれてきた。しかし改めて作品を見渡していくと、短連歌には先行作品を旺盛に取り込んでいる様子が見られた。なかでも、複数の先行作品の主題に関わらない部分を定型化して「型」として作品に取り入れるという連歌特有の先行歌摂取の方法は、やがて新古今的な本歌取りの手法と交差する方向へと発展していくものであった。

最後に第三章では、前章までに考察してきた新古今時代以前の今様・短連歌に内在する方法が本歌取りの方法と影響を及ぼしうるものであったことを踏まえた上で、新古今前夜における新風歌人らの実作を分析していくと、新風歌人らの詠は、和歌周縁部の領域から影響を受けたような先行作品摂取の方法を排除することなく受け入れ、確立以前の本歌取りが多様な方法で試されていたことが確認された。このことより、当代的な流行歌謡のたぐいの影響が新古今時代へ向かう過渡期の歌にとりこまれることで、先行歌を摂取する方法の自由度が拡大し、さまざまな先行歌摂取の方法が試されるなかから、やがて新古今時代の詠風へと洗練されていったであろうことが本論で確認してきた一連の流れから推測された。

このように本論は、これまでさほど言及されることがなかった和歌周縁部から和歌へともたらされる影響について捉え直しをし、その影響は単に本歌取りの言説のみならず、新古今前夜の新風歌人らの詠風そのものにかかわってくる可能性を提示した。

本論文は、王朝和歌の達成以後『新古今和歌集』の完成までの時期を対象として、いわゆる新古今的表現の成立の様相を捉え直そうとする論考である。表現の成立に関する研究は既に多くなされている中で、新たに和歌の周縁部との関わりの中で考え直す視点を設定し、独自の解明を成し遂げている。

全体は、第一章で今様との相関を、第二章で短連歌との相関をそれぞれ中心に、具体的な事例に基づきながら、新たな表現が生み出される実態を検証する。その作業を踏まえて、第三章で『新古今和歌集』成立前夜の歌壇の主宰者、藤原良経の本歌取り手法を再検討する。以上を総じて「結び」の章でまとめるという構成である。

第一章は、顕季・俊成・寂然の和歌における今様との関わりを詳細に検討したもので、それぞれ新たな関わりを見出したことは貴重であり、和歌と歌謡との関わりを本格的に捉え直す契機を示した考察として有益である。

第二章は、短連歌との関わりを多方面から検討したもので、鎌倉期の説話に見られる連歌の実態と、連歌に理解を示し編集や実践を残す俊頼の方法を検討し、和歌との関わりが認められることを詳細に解き明かした。個の作品における影響関係のみならず、型としての生成とその受容の実態までを指摘したことは新しく、前章同様、新たな解明として学術的な価値を有している。

第三章は、第二章の考察の上に、新古今時代の和歌を検討すべく、良経の本歌取りの方法へと展開させたもので、まず建久期の十首贈答歌群、続いて『六百番歌合』における、それぞれ周縁部との相関を検討し、その特質を導き出した。

以上の検討から周縁部との関わりから新古今的表現が成立してきた過程を明らかにすべく、多岐にわたる課題に対し、労多き作業を重ね、その検討によって即興性・遊戯性を属性とする歌謡・連歌が正統な文芸たる和歌の展開に一定の役割を果たした実態を導き出したことは高い評価が与えられる。

ただし、考察は、そもそも伝存資料の少ない分野との関わりを扱うものであり、それだけにさらに丁寧かつ意欲的に資料を読み込むことも求められる。また、論理の整合性もより精細な段階を踏まえることも必要になろう。

特に、位相の次元が異なる和歌の世界と今様の世界をあっさり連続的なものとして捉えてしまうのは、歌壇を覆う時代的な傾向を論ずるうえで、必ずしも十分とはいえないと思われる。また、今様との影響関係を論ずる場合にも、『梁塵秘抄』だけに注目するのではなく、もっと基盤的な文化的背景にも視野を広げて論ずることが求められる。特に仏教的な唱導・講釈の場などに留意する必要がある。また、経典の受容についても多様な可能性を思量する必要がある。

しかし、以上のことを総合的に判断するならば、精力的に取り組む姿勢を窺わせる本論の叙述は、それら残された課題に対し、今後とも積極的に取り組む意欲を窺わせ、全体として意欲に富んだテーマの大きい論文であり、論調も無理なく、さらなる発展性も見込まれるので、博士論文としては可と判断される。